

# 東京大学 世界史

入試問題 解説

(略称:黄表紙)

2019年・2018年編

神野 正史

JRT出版

# 目 次

本書のコンセプト

東京大学世界史 2019 年度

1. 第1問
2. 第2問
3. 第3問
4. 第4問

東京大学世界史 2018 年度

1. 第1問
2. 第2問
3. 第3問
4. 第4問

出帆の言

## 本書のコンセプト

東大入試では論述をモノにすることは必須ですが、論述というのはたいへん難しいものです。

毎年受験生の論述を添削していますが、たとえ東大を志望するような優秀な子でも、提出される論述答案は、それはもうひどいものです。

ほとんどの子は、論述にも何にもなっていない、ただ持てる知識を総動員して字数を埋めただけ——という代物です。

しかしながらそれも詮ないこと。

各予備校の著名な先生方が書いた「模範解答」ですら、「私が採点者なら0点だな」というものも珍しくないくらいですから、17~18の子供には荷が重くて当然です。

もちろん非の打ちどころのない、すばらしい「模範解答」も多く見かけますが、今度は逆に、教科書に載っていないような知識もふんだんに盛り込まれたりするなど、「こんな完璧な模範解答、たかが17~18の子供が制限時間内に書けるわけがない」というものだったりします。

「過ぎたるは及ばざるが如し」で、どんなに「完璧な模範解答」を示されたところで、それが子供たちに書けるわけがないものであれば、それはただその教師が「俺様ほどになるとこれくらいの完璧な解答が書けるのだ」と誇示している以上の意味を持ちません。そのうえ、裏話を話せば、そうした「完璧な模範解答」はたいてい多くのスタッフを抱え、彼らが総出で資料を調べあげ、添削しあって熟慮と時間をかけて書かれたものであって、その執筆者がひとりで書いたものでなかつたりします。

自分すら書けないような「模範解答」を子供にひけらかすことに何の意味があるでしょうか。

喩えるなら、拳法道場の門を叩いた初心者に、道場主がいきなり拳法奥義の限りを披露しているようなもので、そんなものをいくら見せつけられたところで、道場主の虚栄心を満たすだけで初心者が強くなれるわけがありません。

初心者には「奥義」ではなく、徹底的に「基本」を叩き込まなければいけません。これと同じように、論述指導で重要なことは「完璧な模範解答を誇示」することではなく、17~18の子供が教科書の知識の範囲内で合格答案を書けるようになるための「基本」をひとつひとつ明示し、導いてあげることです。

本書はそうした指導方針に基づいて進められます。

それでは以下、解説を始めていきましょう。

A handwritten signature in black ink, reading '神野正史' (Kenji Kishida) in a cursive style.

## 1-19

### オスマン帝国解体（18～20世紀）

#### 第1問

1989年（平成元年）の冷戦終結宣言からおよそ30年が経過した。冷戦の終結は、それまでの東西対立による政治的・軍事的緊張の緩和をもたらし、世界はより平和で安全になるかに思われたが、実際にはこの間地球上の各地で様々な政治的混乱や対立、紛争、内戦が生じた。とりわけ、かつてのオスマン帝国の支配領域はいくつかの大きな紛争を経験し今日に至るが、それらの歴史的起源は、多くの場合、オスマン帝国がヨーロッパ列強の影響を受けて動揺した時代にまでさかのぼることができる。

以上のことを踏まえ、18世紀半ばから1920年代までのオスマン帝国の解体過程について、帝国内の民族運動や帝国の維持を目指す動きに注目しつつ、記述しなさい。解答は、解答欄（イ）に22行以内で記し、必ず次の8つの語句を一度は用いて、その語句に下線を付しなさい。

アフガーニー

ギュルハネ勅令

サウード家

セーヴル条約

日露戦争

フサイン=マクマホン協定

ミドハト憲法

ロンドン会議(1830)

# 論述の基本を押さえる

論述を書くにあたっては、ただ闇雲に「論述問題を解きつづける」だけ、「模範解答を見よう見まねでマネするだけ」では一向に実力は付きません。

きちんと「基本」を押さえ、つねにこれを意識し、留意しながら書くことが肝要です。 それでは、論述を書くにあたって留意すべき「基本」を列举してみましよう。

## ● 論述基本 1 ●

### 「設問条件を満たす」

論述に限らず、試験問題というものは「設問条件を満たす」ことが絶対です。

どんなにすばらしい論述が書かれていようと、「設問条件」が満たされていないければ点数になりません。

至極当たり前のことのように思うかもしれませんが、学生の答案を見ると、これが守られていないものがあまりにも多く、驚かされます。

本問の場合、「22行（1行30字として660字）以内で～」とありますから、その90%（20行）は埋めること。

字数が少なすぎれば、読んでももらえません。

また、「指定語句を一度は用いて」という条件がありますからこれを使用することは当たり前、「下線を付せ」とあるのでかならず下線を施すこと。

実際に教え子の論述の採点をしていると、下線を施されていない答案を見かけることがほんとうに多い。

下線が付されていないだけで減点（場合によっては指定語句が使用されなかったのと同じ扱い）にされますので、注意が必要です。

さらに、指定語句は「指定語句のまま」使用しなければなりません。

本問では、指定語句のひとつに「セーヴル条約」というのがありますが、これを「セーブル条約」と勝手に書き換えて使用してはいけません。

ただ、「ロンドン会議（1918）」の（ ）内は省いてもよいでしょう。

「ロンドン会議」といってもたくさんのロンドン会議がありますから、「そのうちの 1830 年のロンドン会議について述べよ」と言っているだけですから。

## ● 論述基本 2 ●

### 「出題意図を捉える」

論述は何をおいても「訊かれたことに答える」こと。

永年予備校で指導してきて、圧倒的に多いのが「字数はびっしり埋めてあるけど、何ひとつ設問（訊かれたこと）に答えていない」というピント外れな答案です。

本人は「解答欄に文字を埋めた」ことで手応えを感じていたりしますが、たとえその論述答案に何ひとつ間違いが書かれていなかったとしても、訊かれたことに答えていない答案は「0 点」です。

日常会話で喩えるなら、母親の「今日は宿題やった？」の問に対して、子供が「今日は文化祭の準備で帰宅が遅くなっちゃった」と答えているようなもので、母親なら行間を読んで「つ

まり、やってないのね？」と察してくれるかもしれませんが、論述では「うん、帰りが遅くなったかどうかなんか聞いてない、宿題をやったかどうかを聞いている」となり、「0点」です。

たとえば本問では「帝国内の民族運動や帝国の維持を目指す動きに注目しつつ」とあるため、たとえ「オスマン帝国の解体過程」について答えたとしても、それがここに重点を置いたものでなければ得点になりません。

### ● 論述基本 3 ●

#### 「導入文から出題意図を読み取る」

そのためにも導入文（リード文）もきちんと読みます。

本問は、直接設問に関する部分は最後の4行のみで、前半の7行はすべて導入【リード】となっており、直接、設問とは関係ありませんから、試験は時間に追われていることもあって、設問部分だけを読んで導入を読むことを疎かにしがち。

しかしながら、導入と設問の接続句に「以上のことを踏まえ」とあるように、ここに解答を書く上で重要なヒント・指針が書かれていることがあり、きちんと読んでおかないと【論述基本2】を押しえられずピント外れな解答となってしまうこともあります。

### ● 論述基本 4 ●

#### 「指定語句から出題意図を読み取る」



中略

(実際の本には「論述基本 4」以降も示されています)

---

# 解 説

---

まず、問題の設問部分だけを抜粋してみます。

## 設 問

18 世紀半ばから 1920 年代までのオスマン帝国の解体過程について、帝国内の民族運動や帝国の維持を目指す動きに注目しつつ、記述しなさい。

### ① 出題条件を確認する。【論述基本 1】

・書くべきことは 3 つ。

1 : 18 世紀半ばから 1920 年代までのオスマン帝国の解体過程

2 : 帝国内の民族運動

3 : 帝国の維持を目指す動き

・留意点が 3 つ。

1 : 具体性を以て書く

2 : 22 行 (660 字程度) の 90%を埋める

3 : 指定語句をすべて使用し、これに下線を施す

本問の大きなテーマとしては「オスマン帝国の解体」ですが、この点については、拙著『世界史劇場』シリーズ第 11 巻「侵蝕されるイスラーム世界」(ベレ出版) に詳しいので、これを読んでみることをお勧めします。

## ② 導入文から出題意図を読み取る。【論述基本2・3】

まず導入【リード】文を読んで、そこから解答のヒント・指針がないかを探ります。

### ・導入【リード】文第1文

**1989年（冷戦終結宣言）以降30年の国際状況**

### ・導入【リード】文第2文

**往時のオスマン帝国領内での紛争の歴史的起源がオスマン解体期に遡る事実**

「今年の東大論述の導入【リード】文はあまりヒントにはなっていません」という解説を見たことがあります。この解説者はまったく出題者の意図が見えていません。

設問そのものは「18世紀半ばから1920年代までのオスマン帝国の解体過程について答えよ」となっていますが、この導入【リード】文を無視してただそのことについてのみ論述したならば、ピントのボケた論述となり、高得点は望めません。

導入【リード】文では、まず第1文で「冷戦終結宣言以降30年間の国際状況」が述べられ、次いで第2文で、「この30年間に起きた紛争の中でも、特に往時のオスマン帝国領内で起きた紛争」はその根源的原因を「オスマン帝国解体期まで遡【さかのぼ】って求めることができる」と述べています。

そのうえで、導入【リード】文と設問を「以上のことを踏まえ」という接続句で繋いでいるのですから、ただ淡々と「オスマン帝国の解体過程」について述べるのではなく、「オスマン帝国の解体過程」の中でも特に「冷戦終結後の30年間に往時のオスマン帝国領内での起きた紛争の遠因となったもの」を中心に述べるのが求められています。

この点に気づくかどうか本問の得点を大きく左右することになるのですが、残念ながら巷間、(どことは申しませんが) 各予備校が発表している“模範解答”を見てみると、

「以上のこと(導入【リード】文)を踏まえ」ることなく、「淡々とオスマン帝国の解体過程について述べられているだけ」というものが数多く見受けられます。

こうしたお世辞にも褒められたものではない“模範解答”を見ることで、それぞれの予備校の世界史講師の程度【レベル】を推し量ることも出来ます。

後略

(ぜひとも本書をお買い求めください!)